

# コミュニケーション能力を伸ばすための小学校英語活動のあり方の模索

—文字指導の導入を考えながら—

北岡順子\*1・伊東 英\*2

The main purpose of this paper is to introduce the method of teaching the English alphabet in elementary schools. This paper shows four points as follows:

- (1) how English lesson started in Fuzoku Elementary School attached to Gifu University,
- (2) how teachers gave 5<sup>th</sup> or 6<sup>th</sup> graders English lessons,
- (3) how the alphabet was introduced in English classes and
- (4) research of effective ways to teach the alphabet.

This paper will propose methods of teaching the alphabet and propose ways to improve the students' ability of reading the alphabet in elementary school.

〈キーワード〉 小学校英語, 文字指導, コミュニケーション能力

## I はじめに

岐阜大学教育学部附属小学校（以下、附属小学校）では、平成 10 年からコミュニケーション能力の育成を主眼におきながら英語活動を「総合的な学習」の時間に導入してきた。

当時は英語にふれながらゲームなどの様々な楽しい活動を行ってきた。その活動の中で自己を表現したり、コミュニケーションを行ったり、外国の文化を理解したり、相互理解を深めたりしてきた。平成 13 年度以降はさらに楽しい活動だけではなく、英語を知識として蓄積させようと試み、体験を重視しながらも英語学習に傾斜をかけることにした。もちろんカリキュラムについても言語の系統性を考えながら作成してきた。更には以下のように英語科としての力をつけるために基礎・基本を附属小学校独自で設定することとした。

- ・言葉や態度で意欲的に自分を表現したり、積極的に活動に参加したりすることができる。（意欲的な態度）
- ・相手を意識して自分の言いたいことを言葉や態度で伝える。（自己表現）
- ・相手の考えや背景を理解し、相手を受け入れる。（異文化理解）
- ・英語の言語表現にかかわる理解ができる。（言語理解）

## II 子どもたちの姿

附属小学校の子どもたちは、とても活発である。英語の言葉だけではなく、自分の気持ちや想いを正直に表現しようとする意欲がみられる。

低学年ではまだ知らない語でも教師や CD などの音を聞いてみんなで一斉に大きな声で模倣することができる。聞いた音をそのままリピートするので細かい部分はともかく英語らしい音を身につけることもできている。活動においては仲間とかかわりながら活動を進めることができる。

中学年では低学年で学んだ語彙をもとにインタラクティブな活動をしている。多くの子と積極的にかかわっていかうとする姿がよく見られる。また、学んだ語彙や表現をできるだけ使おうとする意欲があり、英語でうまく表現できない時も日本語を少しずつ交えてでも話そうとする姿が随所に見られる。

高学年になると自分から仲間を求めて話しかけたり、仲間の話そうとする姿を推測して聞こうする姿も見られる。

以下は平成 17 年度の子どもの意識調査の結果である。（図 1）

低学年では、「ゲームや歌が楽しいのもっとやりた

\*1 岐阜県教育委員会 \*2 教育学部生涯教育講座

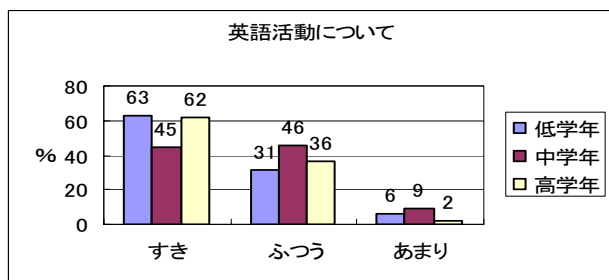


図1 英語活動について

い。」「いろいろな国の話を聞きたい。」「ALTの先生にもっと入ってもらいたい。」などといった楽しさを追求したいという思いが強い傾向にある。

中学年になると「お店屋さんごっこがもっとやりたい。」「もっと先生に英語を話してもらいたい。」「外国の文化や食べ物を知りたい。」「メールの交換がしたい。」といった英語を言語を扱う教科としてとらえ始めていたように思う。

高学年になると、「ビデオ作りが楽しい。」「書きたい・読みたい・会話をしたい。」「中学校の勉強したい。」「調べ学習がしたい。」など英語を学習したいという願いがあった。

### Ⅲ 附属小学校卒業生の追跡調査

一方、附属小学校で英語活動にふれた子どもたちの動向についても追跡調査を試みた。

平成17年度は小学校の英語活動に取り組むと同時に、中学校1年生の1学級の授業にもT2の教員として参加した。中学校では週3回の英語の授業が行われており、1クラス40人で進められている。当時の中学1年生の生徒たち（当時の中学2年生）は小学校1年生からすでに英語にふれており、定着しているかどうかは別問題として、相当量の英語がインプットされていると考えられる。その点からすればスムーズに中学校の学習にも入っていったのではないかと思われた。一方、1学級40人のうち4分の1が他の小学校から入ってきていることもあり、その差異がどれくらいあるのか明らかにしたいと考えた。しかし実際には積極的にかかわりあう姿以外は、ほとんど差異は見られなかった。おそらく他の小学校でも盛んに英語にふれてきているのであろう。どの生徒も同じスタートを切っているようにみえた。そんな雰囲気

の中で授業の初期段階では「話す・聞く」を中心に楽しく行われていた。授業に対する生徒たちの反応は次のようなものであった。



- ① 活動に意欲的であること
- ② ほとんどの生徒たちが文字を書くことができること
- ③ 読むことにもあまり抵抗がないこと
- ④ コミュニケーション活動ではターゲットのダイアログだけでなく、その前後にもHelloという投げかけやThank you.といった言葉でしめくることができる。

①については、本校出身の生徒たちも他の学校から来た生徒たちもとても意欲的に取り組んでいた。

②については、本校では文字としてあまりふれてこなかったが、ほとんどの生徒たちが書いていた。しかも4本線のノートを使用していない生徒も何人かおり、全体として書くことに慣れているといった印象を受けた。学校で扱ったことがあまりないことを考えても、個別での学習を進めてきた生徒が多いことは一目瞭然であった。

③については、既習内容のフレーズなのでいくつかの文を数秒で読んでいる。教師（指導者）は指で文を押さえながら読むように指導している。文字と音声を一致させるための工夫であり、生徒たちもほとんど間違わずにこの一連の動作を行っている。

④については、小学校のインタラクティブな力が活かされていると考える。小学校の中学年ではかかわりの活動を主に進めてきた。その際にはターゲットのダイアログだけではなく、その間に”Hello.”や”Thank you.”などを入れ、会話のマナーとして表現することを大切にしてきた。中学校の入門期のインタラクションの活動においても何組かのやりとりの中でそのようなかかわりが見られた。

また、10文作りがそれぞれのレッスンにおいて仕組まれる。自分で場面設定をして会話文を作るのであるが、これを10文だけでなく、それ以上の数の文を書いている姿が見られる。文そのものは「主語+動詞+目的語」

と言ったそんなに複雑なものではないが、生徒たちは自分なりに話を膨らませて書いている姿には驚いた。

このことから中学校1年生になってから、「読む・書く」力がうんと伸びてきていることがわかる。さらに「書く」という行為に、「もっと長い文を書こう」「もっといくつもの文を書こう」という意欲が備わっていることがわかる。そのベースになっているものが、附属小学校で培われた意欲ではないかと推測できる。

#### IV 附属小学校の高学年の子どもたちの指導

このような中学校の実態を踏まえながら、小学校でも英語活動を継続しながら子どもたちの意識調査を重ねているうちに高学年の子どもたちの意識が次のような変化を示していることが分かった。(図2)

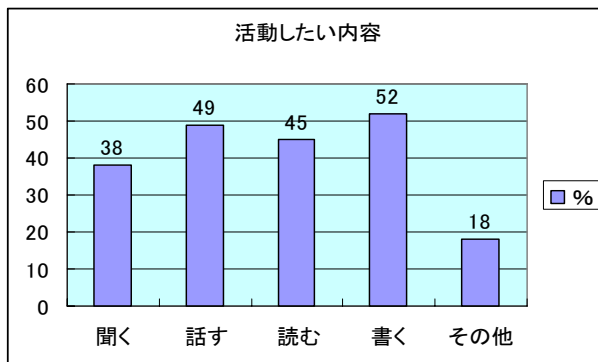


図2 活動したい内容

「読む・書く」について学習意欲が高まってきている。音声にも十分にふれ、内容もおおむね理解できていると判断し、文字を取り入れた学習を試みることにした。文字を取り入れた学習というのは中学校との学習とも重なってくるため、小中学校9年間の学習をトータルで考えることにして、特に小学校6年の後半から中学校1年の前半、すなわち中学校入門期をどのようにしていくかを焦点化して考えることではないかと思い、次のような指導方法をとることにした。

- (1)英語に対応しているローマ字のへボン式の復習をする
- (2)簡単な英語の単語レベルの言葉にふれる(読む・書く)
- (3)フォニックスを毎時間導入する

上記のような活動を繰り返すことで高学年の児童は感想として「文字がかけてうれしい」「中学校でも役にた

つ」「単語がわかるようになった」と述べている。附属小学校の高学年の子どもたちの英語の授業への興味・関心が他の学校に比べて高いのは文字の導入によるものとも考えられた。しかし、導入したものはローマ字を生かした固有名詞を書いたり、あまり順序性のない簡単な単語を読んだりする程度であり、それ以上前には進まなかった。同時に文字が入ることで内容が複雑化し“英語にふれることは難しい”と感じる児童も現実に2%いた。一般的に中学校1年生の生徒が英語学習で最初につまずく原因もそこにあると考えられている。

3つの指導を繰り返してきたところで18年度末に高学年の40人を対象に次のような2点についての調査を行った。

- ① How are you? What day of the week today? What did you do yesterday? と言った質問を毎時間の授業を繰り返しているが、どれくらい理解しているのか。
- ② can を使って質問をしたり、応えたり、質問を作ったりすることでどれくらい can の使い方を理解しているのか。

音声ではとらえにくいのでいくつかの質問に分けてカタカナで表記するようにしたことで次のことが分かった。毎回英語の授業のはじめにあいさつとして導入している How are you? という質問に対しては40人中39人が fine, thirsty, happy, などそれぞれの言い方で表現している。また、導入時の What day of the week today? という質問に対しては約半分の児童が理解できていると思っていたが、この内容は文法的にも難しいので、普段の授業にでも補助的な投げかけをすることが多く、子どもたちはむしろその補助的な部分を理解しているのであって文そのものを理解しているのではなかったことが分かった。

次に What did you do? という質問については、89%の児童がアイ スタディ 国語。(I study 国語。)アイ ゴトゥ アピタ。(I go to Apita。)アイ リーダ ブック(I read a book.)などと口語で表現するように記述している。もちろん中にはアィム ウォッチング TV.アィムウォッチ TV.アィム プレイ ゲーム. と文法的に間違いのものも含まれていた。

can を使った疑問文で質問し合う部分では、既習の内容を使って 92%の児童がキャニユーピールポーズ？ (Can you peel apples?) キャニユープレイザピアノ？ (Can you play the piano?) と口頭で表現できていた。

キャン ユー ピール アップルズ？とか

キャン ユー プレイ ザ ピアノ？とならないのは音声重視の英語活動の賜であると判断できる。また can の答え方については 86%の子どもたちが“イエス、アイキャン。”(Yes, I can.) “ノー、アイキャント”(No, I can't.) と応えていた。しかし残りの 14%の子たちは“ノーアイキャン”(No, I can.)と応えていた。カタカナ表記をさせてみて、間違えて表現していたことが分かったことであり、口語表現だけの場合には決して分からなかった。今後の修正の手だてとして文字を導入していくことが有効ではないかと考える。

平成 17 年度から 18 年度にかけては、4 年生の国語のローマ字学習からへボン式を導入し、英語の授業のティーチーズトピックで、固有名詞を紹介しながら、少しずつ普段よく目にするような英単語の読み方を盛り込んでいき、英文字にも慣れるようにしてみた。

Toyota Toshiba Nintendo Nissan Sony  
Fujitsu kikkoman Yamazaki Nisshin Lotte Fujiya  
Sunkist Seiko Citizen Canon

さらに分かりやすくするために、/To・yo・ta / To・shi・ba / Fu・ji・tsu / Sun・kist /などと少しずつくぎって読むようにも練習してきた。ただしCanon のように c を [k]と発音することはローマ字ではないので、4 年生から音声と文字を一致させるための以下のようにフォニックスにも少しふれてきた。

a says aaa apple b says bbb bear

c says ccc cow d says ddd dog

cap plus e makes cape

pet plus e makes pete

cut plus e makes cute

road coat boat tail pail fail train

当時の 6 年生はフォニックスに毎週接していたので、文字を読むことに対してあまり抵抗がないのではないかと思った。しかし実際は cape の一語だけを取り出し

て提示しても/keip/と正確に読めた児童は 71%に留まっている。音楽にのって発音することはできても、一語としては読めない。つまり、文字を読むというよりは、単語そのものを音として取り入れていると考えられた。しかし一方では簡単な英文を聞かせてみると、全文は聞き取れていないが、その中からわかる単語を結びつけて組み立てをしていることもわかった。この点においても音声と文字を組み合わせることでより理解が深まるのではないかと考えた。

## V 平成 19 年度の試み

19 年度は 6 年生にターゲットを絞ってどのように文字を導入することが効果的なのかを以下のような 2 つの方途で模索することにした。

方途 1 児童の授業観察と実態調査・分析

方途 2 授業時間内での文字指導

### 1) 方途 1 について

毎週月曜日に前任校の 6 年 2 組において授業の様子を観察したり、文字にかかわる内容でアンケートをとりながら子どもたちの実態を把握する。アンケートの内容は以下の通りとする。

方途 1-(1)

学校外でどの程度英語にふれているのか。

方途 1-(2)

ローマ字と英語の違いについてどれくらいの認識をもっているのか。

方途 1-(3)

音声表現に親しんでいる児童がそれらを文字として目にした時に、どれくらい読むことができるのか、また文字を読む際にどのような操作がなされるのか。この調査により、子どもたちの文字の認識程度が分かり、どのような操作で文字を読もうとしているのか思考の流れが分かる。

方途 1 の結果から

方途 1-(1)について

6 月に行った調査では、全体の 74%の子どもたちが英語の塾や英会話教室に通っていることが明らかとなった。(図3)

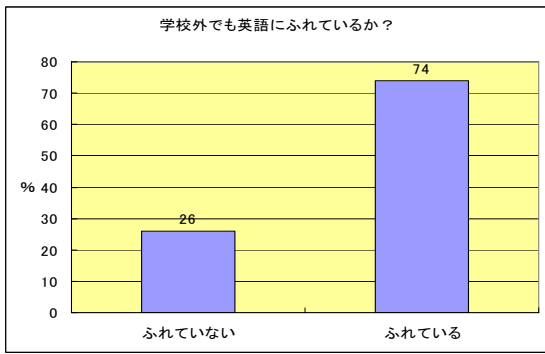


図3 学外でも英語にふれているか

附属小学校の6年2組の39名(当日は1名欠席)のうち、学校以外で塾や英会話学校などでなんらかの形で英語にふれている児童は29名いる。そのうち、特に「聞く・話す」活動を中心としているのは2名で残りの27名は聞く・話す活動だけでなく、「読む・書く」活動にもふれていることがわかる。(図4)

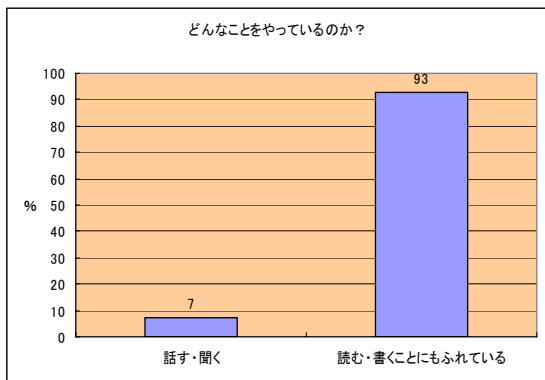


図4 どんなことをやっているか

具体的な活動内容は次の通りである。

- ・英語の歌(ABCの歌ではない)を歌う。
- ・家でCDの会話を聞く。
- ・コピーに書いてある文を読む。
- ・中学校や高校の教科書や文字を写す。
- ・シャツ・くつ・ブラウスなどの単語を書く。
- ・アルファベットの書き写しをする。
- ・ゲームをする。
- ・英文を読む。
- ・英語で描かれた漫画を読む。
- ・三人称単数現在の語尾-sの使い方や疑問文、過去形、未来形、否定文など文法を勉強している。

方途1-(2)について

次にアルファベット26文字A~Zまでの読み方について、どの程度認識しているのかを調査するため、アルファベットの文字だけを記載した用紙に読み方をカタカナで記入させ、以下の実態が得られた。(図5)

- ① 英語のアルファベットの読み(名称)が書ける。
- ② 英語のアルファベットの読みに加えて、AIUEOの母音に対応する音の読みが書ける。
- ③ 英語のアルファベットの読みに加えて、AIUEOの母音に対応する音の読みが書ける。さらに子音の発音の読みが書ける。
- ④ その他

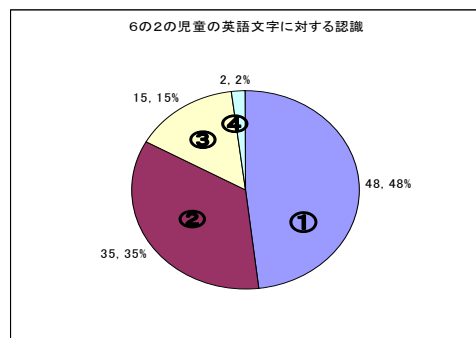


図5 英語文字に対する認識

方途1-(3)について

小学校の低学年から児童が言い慣れている動物の英語名と文字をどの程度結び付けられるかを以下の調査票(図6)を使って調査した。

Let's try!

文字はどの動物をしめしているのかな? \*

あてはまるものの数字を□に入れて下さい。\*

<input type="checkbox"/> dog	1	2
<input type="checkbox"/> rabbit	3	6
<input type="checkbox"/> cat	4	5
<input type="checkbox"/> tiger	7	8
<input type="checkbox"/> monkey		
<input type="checkbox"/> duck		

どんなふうに文字と絵をつなげたのですか? その方法やわけなどあなたのひみつを教えて下さい。\*

図6 調査票

結果として表 6 の様に 83% の子どもが、全問正解であった。他の 17% の子どもにおいても全く分からないということとはなかった。

表 1 結果

	人数/40 人	%
全問正解	32 人	83%
部分正解	8 人	17%

次にどのような操作をしながら回答をしたのかを調査してみた。

- ・最初の文字から推測した。
- ・綴りから推測して読んだ。
- ・言葉の長さから推測した。
- ・学んだことがある。 など

上記の回答から分かるように児童の多くは単語の最初の文字を見て推測していく。では最初の文字を同じにした場合はどのような操作がなされるのかと疑問に思い、次の調査票で質問をした。(図 7) これは snake, sheep などの様に同じ文字で始まる単語を並べることで、snake なのか sheep なのかを絵を見ながら選択させる方法である。

結果は前回(表 1) とほぼ同じ内容であることが分かった。(表 2) また、どのような操作で文字の区別をつけ

ているのかという点に関して多くの児童がそれぞれの単語の 2 番目の文字で判断するのではないかと予想したが、実際には以下のような方法で判断していたことが分かった。

表 2 結果

	人数/40 人	%
全問正解	33 人	83%
部分正解	7 人	17%

- ・ sh は /ʃ/, s は /s/, と発音するから。
- ・ co は /ka/, ca は /kæ/ と発音するから。
- ・ do は /dɔ/, du は /dʌ/ と発音するから。
- ・ S や C や D の次の文字で判断した。
- ・最後の文字で判断した。

以上の 4 つの調査により、こどもたちの実態として 40 人のうち、75% が学校外で英語にふれ、そのうち、93% がなんらかの形で英語の文字にふれていることや、研究方途 1-(3) では音声表現に慣れている動物の英語名についてはローマ字の読み方を採用して音声と文字を重ねる操作を行っていることがわかった。さらに子どもたちは最初の文字だけをローマ字読みしていたわけではなく、途中や最後の部分といった順序性はないが、分かることから重ねあわせて自分なりに推測あるいは判断していた。しかし、表 5 から分かるようにローマ字と英語を区別している児童の数は 16% である。半数の児童が A /ei/ の文字を見ると /a/ とは発音せず、それがローマ字であるという認識はないと判断し、全員がローマ字と英語の区別ができることが必要であると考えられる。

いずれにしても児童にとって英語を読むという行為においてローマ字の存在を欠かすことはできない。22 文字あるローマ字 (c, l, q, x, v はローマ字には含まれない) は、英語の文字と同じであるが、読み方は全く異なる。ローマ字は日本語の音声を表記するように工夫されたものである。英語の単語を発音する際に、ローマ字を手がかりにすることはできるが、日本語と英語の文字の扱い方が異なり、使用している文字は同じであるが、読み方は全く異なることを意識させることが必要であると考えられる。その内容を方途 2 へとつなげていきたい。

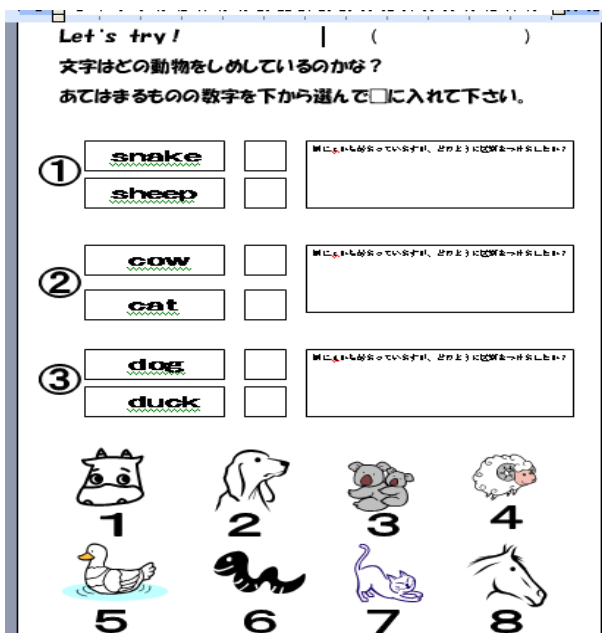


図 7 調査票

## 2) 方途2について

45 分間授業の中の 10 分間で、帯活動として実態調査をふまえながらローマ字の読みと英語の読みの違いや文字の違いについて指導をする。帯活動にした理由は、高学年における主活動が「書く」ことではないからであり、また帯活動の方が児童にはインプットされやすいと考えられる。今までふれてきた動物のカードをもとにしたり、応用させたりして、ローマ字では発音しない英語の音にふれながらローマ字と英語の違いに気づくように仕組んできた。

### STEP 1

T 1 : これは何と読むかな？

**cat**

S : /kæt/

T : これは何でしょう？

**car**

S : /kɑː/

T : じゃあ、これは？

**carrot**

S : /kærət/

T : なにか気づいたことある？

S : c を /k/ とか /kæ/ とか読む。

T : ローマ字では c は発音しないけれど、英語では /k/ と発音します。

### STEP 2

T : これは何でしょう？

**duck**

S : /dʌk/

T : これは何でしょう？

**bus**

S : /bʌs/

T : ローマ字だと u はなんて読むの？

S : ウ....

T : でもこれはなんて読むの？ (と言って **duck** と **bus** の 2 つを読ませる.)

S : /dʌk/, /bʌs/

T : u を a と読むね。じゃあ、これは何かかな？

**cut**

S : /kʌt/

### STEP 3

T : じゃあ、これは何？ (順番に発音させて A とのグループに分ける。i に注目させるために色分けをしておく.)

Aグループ	
<b>tiger</b>	S: /taɪgə/
<b>lion</b>	S: /laɪən/

Bグループ	
<b>rabbit</b>	S: /ræbɪt/
<b>pig</b>	S: /pɪg/

T : じゃあこれは A かな B かな？

**fish**

S : B だと思う。

T : じゃあ、A と B の違いって何でしょう？

(2~3 回、i に注目をさせて発音する.)

S : A は i を /ai/ と発音して、B は i を /i/ と言います。I と他の文字とくっついている。

T : ローマ字だと i はイと言いますが、英語では /i/ と /ai/ の 2 つの読み方があります。

さらにローマ字ではあつかわない文字には c のほかに l, q, v, x の 5 文字があるので、それらについても次のように授業を行った。

### STEP 4

T : 線の上には、どんな文字が入るのかな？

メロン m e    o n

S : たぶん l

T : レモン    e m o n

S : たぶん l

T : オレンジ o    a n g e

S : l か r かよくわからんけど・・・

T : 英語では l を使う場合もあるし、r もあるよ。

S : 何かルールはある？

T : 特にはないよ。



**STEP 5**

T: みんなはドラクエって何か知ってる?  
 S: ドラゴン・クエスト  
 T: ドラゴン・クエスト? クエスト?  
 S: ドラゴン・クエスト  
 T: (カタカナで板書) これは実は英語で、意味は遠征するとか、探検隊とかということだよ。(英語で板書しようとする)「Dragon クエスト」のクは何で始まると思う?  
 S: k? Q? C?  
 T: なかなかいい推測だね。  
 これは実は q で始まるよ。(といって英語でクエストを書く) 正しくは /quest/ と発音します。ローマ字では q で始まることはないですが、英語ではあります。しかも私達が知っている言葉が結構あるよ。  
 S: クイーンとか?  
 T: そうそう、こんなものもあるよ quiz  
 S: クイズ  
 T: そうそう、これは qu/i/ z 正しくはクイズ。これは queen.  
 S: クイーン  
 T: これは qu/ee/n 正しくはクウィーン  
 じゃあこれは何かな? question.  
 S: うーん  
 T: qu/e/s/ti/o/n

**STEP 6**

T: バレーボール バスケットボール・・・  
 の中で v で始まる言葉があるよ。  
 S: バスケットボール?  
 T: バスケットボールは実は b から始まるよ。  
 S: じゃあ、バレーボール?  
 T: そうそう。バレーボールは b から始まります。ローマ字では v は使われませんが、英語では使われます。今、使用したテキストの中にも V で始まる言葉あります。どれかわかるかな?  
 S: Violin!  
 T: 正解! 今度は x の文字について勉強しましょう。身の周りでどんなものがあるか探してきて下さい。

**STEP 7**

T: 身の回りで x がついた文字ってあった?  
 S: ファックス (fax)  
 T: そうそう。  
 S: フォックス (fox) もそう?  
 T: そうそう。そういえば、先生は病院でみたよ。x-ray (レントゲン)  
 S: あ、そうか。  
 T: 掃除のときによく使うよ。  
 S: ワックス(wax)?  
 T: そうそう。

ここまでで一通りローマ字表記されない c, l, q, v, x の5文字についてふれてきたので、こども達がどれくらい理解しているのかを確認する意味で再度調査してみた。(図8) 左に書いてある単語を右側にカタカナで記入すること方法である。

	英語	読み方
1	carrot	
2	volleyball	
3	duck	
4	potato	
5	cut	
6	car	
7	lion	
8	koala	
9	apple	
10	quiz	
11	tiger	
12	basketball	
13	rabbit	
14	orange	

図8 調査用紙

結果を見てみると学級の87%が全問正解もしくは1問のみ不正解であった。(図9)  
 この結果だけを見ていると帯活動で指導してきたことが定着していると言えそうである。ローマ字表記されない c, l, q, v, x の5文字についての間違いも q をのぞいてあまりなかった。むしろ間違えた内容を見てみると



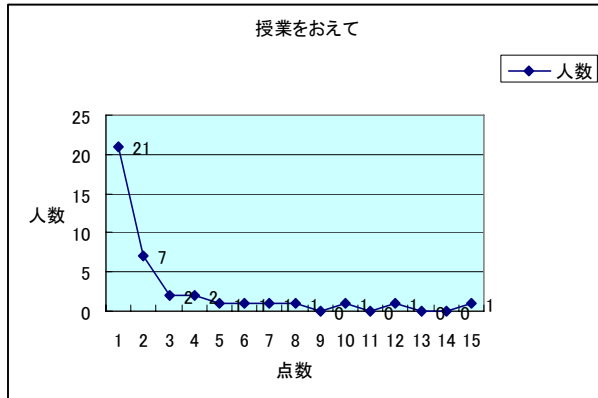


図9 授業を終えて

tiger と rabbit の/i/の読み方の区別ができなかったり、cut を/kʌt/と読めないことの方が多かった。

また orange の読み方をオランダとかオルガンと記入していたことも気になった。

この調査の中で文字についての授業をすることについて4つ（・おもしろい ・まあまあおもしろい ・あまりおもしろくない ・おもしろくない）から選択させたところ、98%の子どもたちが楽しい、まあまあ楽しいと答えている。さらにこれら一連の学習を終えて子どもたちが分かったことについては図10のようにあげている。

## VI 今後の計画

(1) 次のステップとして中学校1年生の教科書で扱う単語と小学校でふれてきた単語の重複の中からいくつかピックアップし、簡単に読めるような指導法を工夫する。

- ・ローマ字では1つの読み方でも英語ではいろいろ読むことができる。
- ・aとかuとかでも、違う読み方をする。
- ・cとかにはいろいろな読み方があること。
- ・ローマ字のような法則がないこと。
- ・英語の文字でも発音が違うことがある。
- ・読みは同じでも書くと文字が違ったりすることがわかった。

図10

- (2) (1)ができたところで文についても少しずつ導入する。
- (3) フォニックスの有効性について研究を重ねる。
- (4) 今年度文字についてのふれた子どもたちが中学校での入門期（4月～6月）でどのように英語の授業に変わっていくのかを追跡調査をする。

## 参考文献

- 1)伊藤弥果, 金澤延美, 2005, 小・中連携を視野に入れた文字指導, *JES BULLETIN* 小学校英語教育学会紀要第6号.
- 2)畑江美佳, 2005, 小学校段階における帰納的な「読み」習得法とその効果, 鶴岡工業高等専門学校紀要論文第40号.
- 3)松川禮子, 1997, 小学校に英語がやってきた!, アプリコット.
- 4)瑞穂市教育委員会, 2004, ローマ字から英語へ, 瑞穂市「英語に親しむ教育推進委員会」.